

代官山・中目黒--渋谷(1)



日本システムウエア本社ビル(No.1)

ふたつの巨大な円筒が互いに浸透しあって、方位をもたない柔らかな曲面が表現されている。円筒は中心を貫く1本の柱で力強く支えられ、建築の構造を明確に見せている。外壁を覆う曲面複層ミラーガラスが都市の表情を楽しげに変形させている。



ヒルポート・ホテル(No.2)

その名の通り、海のイメージを頼りに設計されたホテル。敷地の複雑な形状に対応しつつも、古典的でシンメトリカルな外観がスッキリと建ち上がっているその姿は、見る者に不定形で不思議な印象を与えている。4つの異なる層を積み重ねて作り出されたファサードの表情からは、その後に原が展開していくオーバーレイ（重ね合わせ）の萌芽を読み取ることもできよう。



フジビル40(No.3)

渋谷の中小ビルが集中するただ中であって、ショールームをもつ企業を対象とするレンタル・オフィスビルとして計画された。したがって、建物全体が周辺へアピールするために、斬新なファサードが意図されている。全体をガラスの膜で包み、ピンクのタイルは内部まで貫通し西側のファサードへ至る。角度によってさまざまな表情を見せるこのビルはまた、渋谷の街を印象づける道具のひとつとなっている。



青山製図専門学校1号館(No.4)

「異物としての建築」の極眼解。通称「ガンダムビル」。作者が「拡張建築」と呼び原広司が「新物体」と呼んだこの量塊は、数ある異質な建築の中であって、突出した特異性を放っている。長く伸びる赤い避雷針と高架水槽である回転楕円体が、かろうじてそれが建築であることを知らせてはいるものの。



MOIビル代官山(No.5)

「気持ちよさの追求」を設計上の重要テーマとして、設備の側から建築の可能性を求めた作品。構造と設備を一体化し、外付けブラインドなどによってきめの細かい空調環境を実現。また、1階部分の可動建具は、昼間は庇として、夜は格子状のシャッターとして機能し、街並みに豊かな表情をつくり出している。

詳細な場所は付属地図を参照して下さい。

代官山・中目黒--渋谷(2)



セダー・ストーン・ヴィラ(No.6)

山手通りに面する店舗棟と、住宅街に接する住居棟からなる複合施設であり、その間を中庭が繋いでいる。店舗と住居のファサードは、それぞれがシンボリックな形態をとって鮮やかに対比されており、その差異が中庭に向かって緩やかに収斂していくかに見える。



在日エジプト大使館(No.7)

斜面に沿った敷地を利用して、テラスをもつ6つのフロアを南にずらしながら積層させている。大使館と大使公邸という異なる機能の要求を、旧山手通りに面した北側にしフォーマルなエントランスとレセプション施設を、低く下がった南寄りにインフォーマルなエントランスとオフィス空間を、最上階にはレジデンススペースを配すことで解決している。



ヒルサイドテラス(No.8)

1969年から92年まで、6期に渡り段階的に計画された複合住居施設。端正で質の高いデザインとさまざまな形で展開されるパブリックスペースの連続が、道ゆく人びとを強い磁力で誘い込む。四半世紀をかけて丹念につくり上げられてきたこの建築群はもはやひとつの街並みとして生きた風景を編み上げており、歴史の中を生きるデザインの重み積なりが流れるように展開されている。



在日デンマーク大使館(No.9)

中庭を挟んで街路側に事務棟、奥に大使公邸が配されている。隣接するヒルサイドテラスで楨が実践してきた一連の街づくりに対し、大使館としてのアイデンティティを表明しつつ、いかに街並みとして連続させるのが計画上のポイントであった。事務所棟と大使公邸のふたつの建物は、ヒルサイドテラスの建物と軸を同一にすることで街並みとしての統合化が図られつつ、外壁をヒルサイドテラスの白に対して淡いサーモンピンクのタイルとすることで個別性を表明している。

詳細な場所は付属地図を参照して下さい。

代官山・中目黒--渋谷(3)



オンワード代官山ファッションビル(No.10)

異質な素材の組み合わせを通して建築の調和と対立を表現した作品。その主題は、ファサードにおける素材の地層に集約されている。古いものの崩壊を示す御影石とコンクリート、その上部で剥離しがけた鉛のパネル剥れゆく地層の背後には、次世代を担う新しい建築表現が、今や遅しと待ち構えているかのよう。



ヒルサイドテラスアネックス(No.11)

槇文彦が1969年以来手掛けているヒルサイドテラスの一角にあり、第4期計画にあたる。坂道を挟んで建つ2棟は槇の1 - 3期とは表情が異なり明決な幾何学欲彬態を採用し、坂道の風景をつくるアクセントになっている。



田辺エージェンシー本社ビル(No.12)

周辺環境と鋭く拮抗する鉄橋。「異種交配による他者との橋渡し」をイメージに、鉄骨トラス橋梁のデザインが全体を貫通している。その鉄橋の片側にはガラスブロックで覆われた階段室がビンのように打ち込まれ、内部空間のアクセントになっている。



中目黒Tビル(No.13)

アルミやスチールパイプなどの素材を通して「軽やかな建築」を目指してきた作者が、透明性という新たな主題を表現する転機となった作品。半透明のフィルムがストライプ状に貼られたガラス面からは、内部の様子がとぎれとぎれに映し出されて見える。また、3層吹抜けの大きな空間の背後には、ユニバーサルスペースとしてのオフィス空間が可視的に積み重ねられている。

詳細な場所は付属地図を参照して下さい。

新玉川線：桜新町・用賀(1)



世田谷美術館(No.14)

緑深い砦公園の中に建つ区立美術館。樹本より低く抑えられたエレペーション、徹密に計算されたマッスの分割などから生まれた抑制のきいたフォルムは、周囲の木々と心地よく共存している。午後の陽射しがやさしく差しこむ静謐な渡り廊下が透逸。



CHIAROSCURO(No.15)

かろうじて屋根に曲線が少し残るほぼ直方体のマッスは、一見作者らしくない造形である。これは「形」をテーマにした前作「エコーチェンパー」にがえて「色と光」をテーマにしているからである。ここでは住宅を採光装置とし、内部に多様な色と光のシーン描く。CHIAROSCUROとは、カラヴァッジオやプッサンの絵に特徴的に見られる光や色の使い方を意味する。



瀬田の家(No.16)

都市が場所性の零度に向かう今、ロトンダではないが、4面ともに同一の立面を与え、環境との経路を根絶した。2重の壁に互い違いに配された壁と開口、内部に対しても4面が均質な空間を保証する。意思の強い建築だ。



用賀プロムナード(No.17)

道路が住宅地のコミュニティを分断しないよう、さまざまな仕掛けを配したプロムナードがつけられた。鬼瓦・百人一首・ベンチに水路に橋、近くに砦公園があるから狸の絵柄、思わず心もなごむ。用賀の駅から世田谷美術館に向かう途中に歩こう。

詳細な場所は付属地図を参照して下さい。

新玉川線：桜新町・用賀(2)



小野デンタルオフィス(No.18)

機能をパッケージ化した立体を3次的に配置し、それを開放的な空間で繋げていく手法を展開。機能的に医院部分と住居部分は分けられながらも、吹抜けなどにより交錯する空間が奥行きを感じさせている。



用賀Aフラット(No.19)

中庭を中心に8戸の住戸と住民のためのプライベートな共有ホールからなる集台住宅。楕円のトップサイドライトのあるエントランスからアプローチする地下の共有ホールは、住戸数に対して意外なほど大きな空間が確保されている。住居ユニットは天井高4.5m弱の箱の中に1枚のスラブが挿入されたメゾネット形式で構成され、移動可能な装置的家具（厨房・サニタリー）とともに連続する領域として設定されている。



長谷川美術館(No.20)

「サザエさん」の長谷川町子が姉とともに収集した美術品を展示する、小規模な美術館。外壁は赤レンガで端正にしわれ、60度の軸線をもつ平面は中央の吹抜けを介してシンプルにまとめられている。建物の銃角部にとられたスリットは、トップライトとして2階の展示まで自然光を採り込み、全体の表情を引き締めている。

新玉川線：二子玉川園 / 大井町線：上野毛



玉川高島屋S.C "UP STUDIO"(No.21)

玉川高島屋ショッピングセンターに付属するスポーツ施設であると同時に、街づくりの核となることが意図された。ショッピングセンターのための巨大駐車場と背後に連なる街並みの間に位置し一種の緩衝地となっている。2・3階に張り出したガラスブロックの曲面と、らせん階段を覆うアルミ板が、ファサードの表情を決定している。



白想居(No.22)

白いフレームの集合住宅。割主戸は南傾した丘陵地に沿って段状に重ねられ、南面からの湾曲した大階段と北面からのブリッジが、中央部で繋がっている。建築の骨格となるコンクリートフレームとそれに準じたスティールフレームが、建物金体に虚としての曖昧な空間をいたるところに生み出し、日本的な「和」の感性を示している。



国際聖マリア学院(No.23)

東京在住の在日外国人子弟を対象にした、カトリック系の男子学校。既存の樹木をできるだけ残した形で、道沿いに展開する建物として設計されている。オーソドックスな教室の並びに対して、廊下やホールなどの共有部分にはさまざまな色彩が施され、また異なる素材の組み合わせによつて変化が与えられている。